

---

# オラはロボになっちまっただ

權若俊和

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オラはロボになっちまっただ

### 【Nコード】

N4776BA

### 【作者名】

權若俊和

### 【あらすじ】

高校生：【鳥羽匠<sup>トバショウ</sup>】はうんざりしていた。人間である事。人間の不便さを。いつそのことロボットになってみたいと思った矢先、天才科学者の孫娘：【要パンドラ】が「ロボットにさせてあげる」と言う。冗談半分に付き合ってみるシヨウは実験になる。

シヨウは記憶転換装置を装着し、シヨック電流を浴びる。……彼が目覚めた時、気付く。己の肉体が鋼鉄になっている事を。

シヨウはロボットとして生まれ変わったのである。名も一新し、【イエーガード】。戦闘機・人型へ変形するロボである。

ロボットになった事により、変化する日常……。イエーガードと  
なったシヨウは学力・身体能力あらゆる能力が人間時よりもアップ。  
何でも出来る、非常にイイ気分になり、多くの人間に慕われていき  
…………。

## 第1話 「夢のロボット生活」

### 第1話 「夢のロボット生活」

1

「ま、そこそこかあ」

左右へ髪を分けた少年・【鳥羽匠（〃シヨウ）】はしけた顔で返却された答案を眺めた。

とぼとぼと歩いていき、己の椅子へと着席。

一息つくシヨウの後席の、【大守憲太郎（〃ケンタロウ）】がシヨウの答案を覗き込む。このケンタロウという男、短髪・大柄で筋肉質な男だ。

「ほお、68点か」

「平均前後ぐらいの点数だな」

「赤点じゃないだけいいじゃないか？」

「まあな。……にしてもさあ、ケンタロウ、勉強なんて不毛だと思わね？」

「どういう意味だ？」

「言っちゃあ何だけど、人間って忘れる生き物じゃん？ どうせ忘れるのに何でイチイチ覚えなきゃいけないんだろうって話」

太く、引き締まった両腕を組んで短髪の男、ケンタロウは首肯。

「……言われてみればな」

「まあ学校のテストなんて別に満点採らないと殺される訳じゃないけどさ。……けど、そうもいかない事もあるからなあ」

「例えば何だ？」

「大人になつて働いている時とか？ そりゃ、社会人が失敗なんかしちゃう困るのは分かるけどさ、完璧な人間なんていねえだろ。無理難題だと思うんだよなあ」

「……そうだな。俺の兄も新社会人やっているが、理不尽に怒られる毎日だそうだ」

しみじみとケンタロウは納得。両目を閉じる。

「うへえ、想像するだけで寒気がするよ」

シヨウは舌を出し、苦い顔となった。

「あと、好みのタイプとかもそうだな。よく女とかが言うだろ？『金持ち生まれで、勉強もスポーツも出来る、性格のいいイケメンが欲しい』とか……。逆もまた然りで、『身も心も美しく、自分に尽してくれる女が欲しい』とかそういう部類の話だ」

今度はケンタロウの主張にシヨウが合意。

「イヤだよなあ、そういう、他人を品定めする考え方……。そういうのがあるから、恋愛なんかしたくなくなる。ま、したくてもどうせ俺らなんかモテないけどなハハハ」

自虐と言う名の失笑をうつすらと落とすシヨウ。

「どいつもこいつも、他人に求めるハードル、高過ぎんだよな。他人の事言えねークセしてよお」

シヨウはそのまま、ぼんやりと薄汚い教室の天井を眺めた。

不敵に笑み、冷笑で返すケンタロウ。

「……御尤もだ。……しかし、悲しかな現実、そんなクソ共に認められないと生きていけない……。上の立場の人間の理想通りの人間にならなくては金も飯も手に入らん」

「あゝあ、いつその事、ロボットにでもなれたらなあ。完全に記憶出来るし、プログラム通りに動けるし、身体能力も段違いだし、ヒゲも剃らなくてイイし、健康の為に不味い野菜とか食わなくて済むし……」

「ハハハ、ロボットか……」

シヨウは下らない戯言を意図して言った。

ケンタロウも適当にでっ上げた夢想だと判っている為、失笑に付き合った。

しかし、冗談では無いと思っている人間もいた。

「んじゃ、ロボットになつてみる？」

「は……？」

割り込んで来た気だるそうな印象を受ける口調の女子の声。

それはクラスメイトの【要パンドラ】によるものだった。

ダウンナーな雰囲気で、いつも目を半分閉じて眠たそうな表情をした少女。

パンドラという変わった名前をしているが、それは彼女の祖母が英国人である。外国人の血と名残を持つ所以なのである。

クォーターではあるが、英米人の血の方が濃かったようで、髪は金髪。目は碧い。

その長い金髪をツインテールという髪型にしている少女である。

「あたしのお爺ちゃん、人間がロボットになれるマシンを作ったからさあ」

「本当かあ？ からかってるだけだろ？」

ジトツと両目を細め、シヨウは疑いの眼を向ける。

「冗談半分でほざいた戯言など間に受けているのだろうか？」

シヨウは真偽を確かめてみた。

「ううん。本当。知ってるでしょ？ あたしのお爺ちゃんが科学者だつて事」

「いやまあそうだけど、流石に人間がロボットになる技術つてのはブツ飛び過ぎじゃね？」

「かもね……。だつたら、試して見る？ 今日ウチに来なよ」

涼しい顔でパンドラは言つてのけた。

それはまるでそよ風のように……。

「場所、分かるでしょ？ 東公園の向かいにあるト」

「お、おう……」

シヨウはぼかんと間抜けに口を開けたまま、硬直。

パンドラは逆にのほほんと自分の席へ戻っていった。

日は暮れていき、放課後となった。

「シヨウ、お前家の家に行くのか？」

荷支度を整え、立ち上がったケンタロウはシヨウへ質問。

「ああ、一応確かめておきたいからな。それに、研究所って面白そうだし」

「……そうか。じゃあ明日、研究所の事話してくれよ」

「お前は行かないのか？」

「ああ、野球部があるからな」

「そっか、明日の土産話、楽しみにしているよ」

「ああ……」

そう言い残し、双方は背を向け、反対方向へ歩んだ。

二人共、完全に真に受けていない。

面白半分である。

どうせ、人間がロボットになどなれる訳がない。

そう思い込んだまま、各々の目的地へと足が進んでいったのであった。

シヨウはゲタ箱へと到着。

「あれ？」

意外も……要パンドラがゲタ箱に待機していた。

「行こっか」

「俺を待ってたのか？」

「うん。いけない？」

パンドラは瑞々しい碧眼を上目遣いし、シヨウの顔を覗き込む。

「……いや。現地集合かと思って」

「どの道、同じ場所行くんだしいイジャン？」

「まあな」

「それに、女子一人で帰るのは心細いから……」  
長い睫毛のある臉を閉じ、途単にしおらしい表情で、パンドラは  
呟く。

シヨウは意外に思った。

もつと、クール&ドライな人物かと思っていた故に。

「分かった。一緒に行くか」

「うん……」

パンドラはポケットからスティックキャンディーを取り出し、口  
へ啜えた。

前髪を左右へ分けた少年と金髪ツインテールの少女は学校を後に  
した。

シヨウはぼんやりと脳裏で独り言を呟く。

もしかして、付き人・護衛役目的で俺を呼んだのかあ？

それとも、俺に好意を……って、それは流石にねえな。

だって、女なんつーもんは金持ち生まれで、勉強もスポーツも出  
来る、更に自分にだけ優しいイケメンが欲しい生き物なんだから。

否定はしねえさ。

けど、生憎俺はそんな人間像にかすりもしねえし。

平凡な環境に生れたそこそこ人間だ。

ま、こいつ要パンドラさんは優秀な科学者の孫娘。

大層なエリート様と知り合う機会なんて幾らでもあるんだろうな  
あ。

オマケに美人だ。

俺なんか気がするまでもなく、玉の輿のオウジサマをGET出  
来そつだ。

「んお？」

呟きながら、シヨウはあるモノを目に入れる。

あまり見たくないモノ〃虐めの場面である。

遠目で具体手にどんなやり取りされているか分からないが、複数  
の大柄でチャラチャラした感じの男3〜4人が小柄な男子生徒を囲



み、圧力を掛けていた。

カツアゲ？ 脅し？

大体そんなトコだろうとシヨウは看破。

そうした上で、我関せずと云わんばかりに。通り過ぎた。

「あるんだねえ、ああいうのはスルーするのが得策よね……」

口に啜えているキャンディーの棒をガタガタ動かしながら冷然とパンドラは虐めの光景を見送った。

「ロボットになったら、虐められっ子を助けたり出来んのかなあ」

ぼつりと雲に淀んだ天空を見上げ、シヨウは物思いに耽ってみる。

「鳥羽君って、ヒーローになりたいの？」

「うん、どうだろう？ 正確にはそういう心が“あった”んじゃない？ ほら、男って小さい時、殆どの奴が特撮ヒーローとかロボットアニメとか見るじゃん？」

「らしいね……」

「その時はそういつた作品に感動して、自分もそうなりたいと思うんだよ。……けど、現実にはヒーローのように強く無いので、悪い奴を倒す力が無い。だから、ヒーローになる事をいつの間にか諦めてしまっんだ」

「ふうん、そっか……」

「女の要には分からなかったかな？ あ、差別的に受け取ったのなら、誤つとく」

パンドラは眉間をピクリとも動かさない、クールビューティーフェイスのままだ。

つまりは、表向き、不快な感想は無い。

「いや、分かるよ。何となく。悪い奴、ウザイ奴がのうのと生きているのはイヤだし。でも、あたしも鳥羽君同様、弱いから立ち向かえないけどね」

「まあ、普通そつだよ。ん？ 今思ったけど、お前はロボットになりたいと思わねえの？」

「うん。思わない」

キツパリ言つてのけた。

「だって、ロボットになるとお菓子の味、感じられないじゃん？  
あだし、お菓子食べている時が一番の至福なんだよね」

「ああ、そういう理由かあ」

等々と、淡々と話しながら、二人は徒歩を続ける。

考えてみれば、シヨウはパンドラとここまで長く会話したのは初めてだったかもしれない。

パンドラと親しくなりたかったが、臆病で出来なかったという訳じゃない。

嫌悪し、避けていた訳でもない。

特に興味ある存在ではなかった。だから、積極的に接しようと思わなかった。

そんなシヨウであったが、パンドラと話していくうち、「こいつ、  
イイ奴なんだな」と位は思うようになった。

3

のんびりゆったりと歩いていくうち、パンドラの自宅＝要ラボラ  
トリへ到着。

パンドラに誘導され、シヨウは室内へと進行した。

どういう意図で造られたかなど不明な機器が乱雑に並ぶ空間。

これが研究所かあ。と、感銘に浸るシヨウ。

まるで秘密基地探検している気分。

シヨウは無意識的に童心に返っていた。

研究所の中で1人、黙々と作業をしている人物を目にする。

その人物＝老人男性はむくりとこちらへ向き、曲げた腰を起こし  
た。

「おお、パンドラか。お帰り」

「お帰りー、お爺ちゃん」

「む？ その隣に居るのは……？」

爺にとって、見知らぬ存在「男子生徒」シヨウ。彼の姿をDr要はメガネを掛け直し、凝視する。

「あ、ども、俺鳥羽シヨウです。ロボットにさせてくれるってお孫さんが言うので……来ちゃいました。タハハ……」

咄嗟にしどろもどろ紹介・来客の旨を伝えるシヨウ。

やべ……。愛しの孫娘に手を出した不届き者とか思われたのか？

一応、正直に理由を言ったんだけど……どう出るんだこの爺さん。シヨウは緊張と言う息を呑む。

「おお！ そうだったのかあ！ 嬉しいのお」

ガバツと食らいつくようにDrはシヨウの両手を握り、握手。

Dr要は非常に高揚しており、実に嬉しそうな笑顔をしていた。

「ど……どうも」

いちやもん付けられて追い出されなくて良かった。

取り敢えず、友好的に接してくれてほっとするシヨウ。

「良かったね、お爺ちゃん」

「おお、パンドラ、見つけて来てくれて有難う」

「いやいや……」

パンドラは眠たそうな顔のまま、ふふん と艶やかな唇を曲げ、笑んだ。

「……ところで、シヨウ君だったかな？ 何故君はロボットになりたいんだね？」

一転、真面目な顔立ちを作るDr要はシヨウをじっと見つめる。

「そうっすね……。何っつーか、人間である事が馬鹿馬鹿しく思ってたからなんっすよ」

「ほお、馬鹿馬鹿しい……とな？」

「人間って不便じゃないですか。覚えなきゃいけない事を忘れてしまったり、健康の為に身体を鍛えたり、食事バランス考えなきゃいけないかったり。要らない毛とか生えて、その度に剃らなきゃいけないかったり……。そこで俺、思ったんっすよ。人間の……今の俺の心のまま、肉体がロボットになれば、都合いいよなあ……って」

「ナルホド……」

「ごくごく、Drは首肯。」

「でも、そんな都合のいい事なんか、出来ないっすよねえ。アニメじゃあるまいし」

へらへらと頭を掻いて笑うシヨウ。

そろそろ冗談ゴッコは辞めておくかと、現実的な言葉で刺しに掛かった。

「いいや。出来るとも。それがしたくて、君はここへ来たんじゃないのかな？」

平然と。そう、実に堂々と博士は言つてのける。

寧ろ、シヨウが異端だと云わんばかりに。

「ほ、本当にロボットになれるんっすか？」

「当たり前じゃないか。現に私も一回ロボットになったよ」

「……で、元に戻ったんっすか？」

「うむ。まだこの技術は発展途上でね。もしもロボットの身体が故障した際、私自身がロボットだったら修復出来ないからね。私は人間である必要があるのだよ。人間の魂を転移したロボットが生存し続けられるように見守る為に一応ね……」

「そっか……。やっぱり、俺実験台なのかあ。巧い話だと思っただけど、頭を落とし、悄然。」

シヨウは腐った笑いを溢す。

「まあそう、腐らないでくれたまえ。今のところ、この実験に欠陥はないのだから」

「そうなんっすか」

「うむ。まあ何はともあれ、試してみたまえ。気に入らなかつたら、元に戻してあげよう。大丈夫。お金も何も取らないよ」

「はあ……」

「では、早速転移後のボディを選んで貰おうかね？」

「ボディ……。どんなヤツだろ？」

3人は肉体転移先〃ロボットの格納庫へと移動。

そこにあつたのは2機の人型ロボット。  
大きさは180センチそこの成人男性クラスの背格好。

1機はブルー&ホワイトの翼を持ったロボット。  
背中にキャノピーらしきものが畳まれており、ジェット機に変形しそうな風貌。総じて、細身で、スピーディな印象のフォルムである。

2機目はブラック&グリーンのボディカラーリングで、重厚な腕や脚にホイールを持つ、装甲車に変形しそうな、マツシヴな体系のロボットである。

「へえ、大きさは人間ぐらいなんだな……つつても、俺よりデカいけど」

感心しながら、2機のロボットをまじまじと眺めるシヨウ。

「まあ、巨大だと生きていく上で何かと不便だからねえ。どちらか好きな方を選びたまえ」

「そうだなあ、う〜ん……。んじゃ、青いのにしよつか。個人的にこっちが格好いいと思うし」

「よし、では転移装置へ座りたまえ」  
「ういーっす」

気楽なノリで博士が示した椅子に魂をロボットへ転移する装置へと向ったシヨウ。

「それでは……転移開始！」

博士は発動レバーを引き、シヨウは電撃を浴びる。

「ウオオオオオオツ！！！」

スツと楽になる感覚……重荷を降ろす感覚……。  
そのような感覚に浸るうち、シヨウは意識を失う。  
そして、次に彼が目覚めると。

4

翌日。

ケンタロウはいつも通りに登校し、野球部の朝練を終了し、己の教室へと向った。

「……そういや、シヨウの奴、どうなったかな？ 失敗して髪の毛チリチリになったとか、そんなトコだろうか……？ 状況によって笑うか、慰めるかでもしておこうか」

ぼんやりと呟き、教室のドアを開けるケンタロウ。

「んん？」

自分の前の席〓シヨウの席は空席。

更に周囲を見回し、誰かと話でもしているか確認してみるケンタロウ。

だが、教室内にシヨウらしき存在は確認出来ない。

机横のフックを見やるが、シヨウの鞆が掛けられていない為、まだ来ていないと分かった。

「珍しいな。あいつ、帰宅部だけど、早く学校に来る部類なのだが……？」

ケンタロウは両腕を組んで、表情を渋くする。

「うおーい、窓開けてくれー、窓！」

「んむ？」

ケンタロウ他、教室内の生徒はこの大声に注目する。

「この声は……？」

声の先は窓の外。ケンタロウ達が見やった先には通常ならあり得ないものが、浮遊していた。

小さなジェット機……。ブルー&ホワイトの飛行メカである。

「この声はまさか……」

ケンタロウはこの声に聞き覚えがある。

自分の隣の席で、よく話す人物〓シヨウの声・口調と全く同一なのである。

「そ、そのまさかだ！」

ケンタロウは大体の事情を察し、黙々と窓を開けた。  
すると、小さなジェット機は開いた窓へ飛び込み、両翼を閉じて、  
教室内へ。

教室内の上空で小さなジェット機は変形を始め、人型ロボットへ  
と変形を遂げた！

ズシンと、金属音を立て、ブルー＆ホワイトのロボットは教室内  
へ堂々と立つ。

「うーっす、ケンタロウ。俺だよ、俺。『元』鳥羽シヨウな！」  
ケンタロウをはじめとしたクラスメイト一同は愕然と黙り込む。

先程の発言を考えて、クラスメイトの鳥羽シヨウが自分達の目の  
前に要るロボットになったらしい。

そんなバカな。といったリアクシヨウを通り越して、絶句する一  
同。

そこへ淡々とロボットになる事を手助けした人物「要パンドラが  
悠々と教室へ足を入れる。

「おっは〜。……って、あれ？」  
無性に静かな空間。

いつもなら、休憩時間と言うのは生徒同士が雑談している事が多  
いので、基本やかましいものだが、そうでない為、違和感を覚える  
パンドラ。

だが、絶句している皆が注目しているモノが何か分かったら、す  
んなりと納得した。

「皆、驚いた？ あたしのお爺ちゃんが発明を使って、鳥羽君は口  
ポットになったの。鳥羽君、今ここでロボットとなって改めた名前  
を発表しなよ」

「おお！ そうだな！ いいか？ 皆、よく聞け！ 俺は『元』鳥  
羽シヨウ。そして、今の俺は……カッチョイイ、ヒーローロボット、  
『イエーガード』だ！」

ロボットアニメのような決めポーズを披露する！

「おお〜！」

と、圧倒される生徒達。

今度は節操なく、パンドラへと注目する生徒一同。

「マジで？」「スゲー！」

などと、騒ぎ立てる。

パンドラやロボットと化したショウに群がり、マスコミの如く、問い質す生徒達をよそに、ケンタロウだけは愕然と往生。

「マンガじゃあるまいしと、冗談だと思っていたのだが……。信じられん」

そんな中、ロボットとなったショウ・イエーガードはクラスメイト達の質問ラッシュをへらへらとした態度で受けていた。

「親は何とも言わないの？」

「ああ、この姿だと何でも出来るんだよなあ。勉強も一度教科書見たら教科書の内容、全部完全暗記出来るし、身体能力もケタ外れ！オマケにさつき見たように空も飛べる。だから、親としては便利になって助かるってさ」

「あっさりだなあ」

「ま、親としては生きていく上で必要な能力が備わって良かった。一人前の社会人として生きていけそうって思ったらしいぜ？」

「そっかあ。でも、ロボットだと子孫残せないんじゃない？」

「元々、結婚してガキ持つなんて俺には無理だよ。だから、気に病む問題じゃねえ」

「飯……っつーか、エネルギー補給ってどうすんの？」

「それはな……」

イエーガードは腰アーマーのハッチを開き、そこから一般に出回るあのコンセントプラグ及び、そのケーブルを取り出す。

「こいつを使って充電するんだ」

「そっか。それじゃあ、味覚は感じないんだ」

「ロボットだからな。でも、何でも出来るメリットに比べりゃ、こんなデメリット大した事ねえよ」



等と、質疑応答が飛び交った。

5

画して、鳥羽シヨウの心を持ったロボット・イエーガードの学園生活が始まった。

「ハツハツハ！ 分かる！ 分かるぞ！ その問題イ！ 安い程に！」

如何なる授業も高性能AIを持つイエーガードの敵ではない。

全ての授業で堂々と積極的に問題を解き、教師を啞然とさせた。

数学ではあり得ない速さで正解を導き、

歴史ではこと細かに歴史背景・人物の動向を述べ上げ、

英語では速効で和訳し、高性能AIの実力をフルに発揮した。

他の生徒達は自分達に回答の矢が当らず、「こいつが居て良かった」と、心底嘸み締める事態。

イエーガードの猛威は授業中だけで納まるほどの大きさではなかった。

休憩時間での出来事である。

体育館裏にて。

「うっせえな、おっぱい触らせろよ！」

不良男子達5人が、巨乳で清楚な印象の女子生徒【<sup>メグミ</sup>牛村恵美】を囲んで、破廉恥な行為を強要させようとしていた。

「知ってるかあ？ エロイ体の女って、エッチしたい本能があるからバインボインのエロイ身体になるんだぜ？」

「っー事だ。お前、本当はエッチがしたいんだろ？ なら、俺らとヤとっぜ？」

リーダー格の男が詰め寄り、メグミを壁へ押し付ける。

「ちょっと待ったあ！」

急接近する飛行音。上空より、イエーガード・ジェットモードが飛来。

「チーンジ！ つとお！」

小型ジェット機が空中で人型ロボットへと変形し、降下したまま、不良達を蹴り飛ばした！

「都合のいい他人を保有したがるクズ共め！ このイエーガード様が成敗だ！」

スタツと着陸し、フェイティングポーズを構えるイエーガード。

襲われる直前だったメグミは自分を救ってくれたロボットを啞然と見つめる。

不良達は暴力で他者を圧倒出来る存在そして、恐れられる生き物。身体もタフであり、壁に打ちつけられた不良達は短時間で再起した。

「こいつは……ロボットになったって噂の奴か」

「んにやる、ヒーロー気取りかよ。マジダセエ」

「ハッ、弱い者虐めしているお前らの方がダセエよ。百億倍な！」

端整な鋼鉄の顔を上へ突き上げ、イエーガードは嘲笑う。

「何っ？」

「んだとこの野郎！」

リーダー不良が吼え上げ、不良連中は激昂。

イエーガードへ飛び掛った。

「へへ……キャモン、キャモン！ お前らなんかが束になっても倍になっても俺には勝てないモンねー！」

くいくいと、人差し指を内側へ扇ぎ、挑発的仕草を採るイエーガード。

戦闘が開始された。

「うおりゃあっ！」

青&白のロボットの素体フレームがしなり、豪傑な拳で不良1人を殴り飛ばす！

不良は流星の如く、吹っ飛び、壁へめり込んで気絶。目を白くし、舌とヨダレを垂らす。

「調子に……」

「乗るなよっ！」

左右より強襲するチャラチャラした指輪の付いた拳。

不良2人がイエーガードを挟み撃ちに！

しかし、イエーガードにうるたえる様子は微塵にもない。

「フフ、センサーキャッチィ！」

ススス……。イエーガードの両腕が左右へしなやかに回る。

ガシッ！

イエーガードの両手が不良のナックルを容易に受け止めた！

「何だと！」

ロボットが相手とはいえ、今まで喧嘩で敗北した事などない不良共にとつて信じ難い事実。自慢のパンチを受け止められた事に血の気がサアツと退く。

「こつこつこのを赤子の手を捻るって言うんだらうなあ。あゝら、よつとあ！」

イエーガードはお手玉感覚でさくつと掴んだ拳の先にある不良2名を放り上げ、両者を激突させた。

鈍いクラッシュ音を響かせ、不良2人は失神状態で地面へと墮ちた。

「こんのお！」

最後に残ったリーダーとサブリーダー不良2人が後方より、金属バットを持って殴り掛かる。

流星に金属なら倒せるだらうという戦術を行使したのである。

「へっ」

それでも、イエーガードは鼻で笑う。

……フェイスデザイン上、鼻は無いが。

「バーカ」

腿と足裏のバーニアが噴出！

突然、上空へ飛び、2人の攻撃をすり抜けた。  
不良リーダーと？2は唐突にターゲットに逃げられた為、足元が  
ふらつく。

その様子をイエーガードは空中で高見の見物。

「さあてと……」

イエーガードは左腕のマシガンを展開し、構える。

「……って、流石にマシンガン攻撃は拙いか。一応、殺さない方が  
いいよなあ〜。だったら！」

脚部をフレキシブルに稼働させ、踵を大上げする！

そして、踵はハンマーの如く、不良リーダーの頭部を強烈に撃ち  
つけた。

最後にもう1人を回し蹴りでノックアウト。

僅か1分足らずで、不良5人をこてんぱんにした。

まあ、ロボットなので、こんな芸当出来て当然では有るが。

「ハハハッ！ ざまーみるってんだ。いやあ、良い事するって爽快  
だなあ。……いや、良い事出来る力があるってのが最高に気分がい  
いんだろうな〜」

ハッと、まだやらねばならない事があると気付くイエーガード。

「……あ。待てよ。後で教科書破られたり、仕返しされんのは困る  
な……。だったらそうだな……」

イエーガードは失神中の不良達のズボンを脱がしていく。

「こついのの、ぶつちゃけ、やりたくないけど……。釘は打ってお  
かないとなあ〜」

イエーガードは下半身丸出しの不良5人に恥ずかしいポーズに相  
当するものを取らせ、放置し、消え去った。

置手紙を残して。

その置手紙には

お前らのチンモ口画像を俺は保存した。

ネットに晒されたくなければ、俺に逆らう事もセクハラも弱い者虐

めも恐喝もするな。Byイエーガード。

と、記されていた。これ以降、不良達の横行は途絶えたそう。

「さあて、次のパトロール、パトロールとお！」

ジェット機形態のイエーガードは学園内を縦横無尽に飛び回り、己の力を示せる場を求め回っていた。

音楽室へ通じる渡り廊下。

「うん、重い。もう限界っつ」

軽音楽部の女子達がアンプを床に置き、疲労を示す。

「どうやら、アンプを運んでいたが、重過ぎて、彼女らの腕力・体力に限界が来たようだ。」

「よう！ 大変そうだな！」

そこへ小型ジェット機「イエーガード」が到来。

「あ！ ロボットになったって噂の人……？……」

「イエーガードって呼んで欲しいんだけどなあ。まあいいや、俺が代わりにそれ、持って行ってやるよ。チェインジ！」

軽音楽部の女子達へ変形しながら、降り立つ。

「こいつ、アンプも持っていきたいんだろ？」

「あ……う、うん」

部長で、ウエーブがかったロングヘヤーの【音原真琴】<sup>マコト</sup>は驚きながら、首肯。

噂で聞いてはいたが、いざ本物のロボットが目の前に居るとなると、目を丸くする軽音楽部の面々であった。

「ありがとうございます」

マコトをはじめとした、軽音部の女子達は飛び去って行ったイエーガードを見送った。

無事、重いアンプを送り届けたようだ。

「うわあ。本当に校内を飛び回っているよ……」

嘩然とイエーガード・ジェットモードを眺める副部長のマツリ達。

「……………格好いい……………」

「え……………」

部長のマコトがぼそつと放った言葉にマツリ達他軽音部員は仰天。  
ドン引きする。

生徒指導室。

チャラチャラした……………所謂ギャルに該当する女子生徒・【姫野香<sup>カオ</sup>織<sup>リ</sup>】は30代男性教諭の住田に呼ばれ、話をしていた。

「姫野カオリ……………。はつきり言つて君は成績が酷過ぎる。このままでは進級は無理だな」

「げ、マジっすか……………」

「だが、勉強しろと言つても、君は聞かんだろつ。そこでだ」

「？」

赤く染められた派手な髪を揺らし、カオリは首を傾げる。

「先生と……………結婚してみないか？ お前は生徒を辞めて先生の奥さんになるんだ。どうだ？」

「はん、ナンパっすか？」

「嫌なのか？ 勿体無いぞ？ 先生は未来永劫安泰の公務員だぞ？ 公務員と結婚出来るなんてオイシイ話、又とないぞあ〜」

住田はぐいぐい顔を近づけ、圧迫させながら、言い寄っていく……………。

「いや、公務員と結婚つてのはオイシイと思うけど……………。先生は好みじゃないや。ハゲてるし、キモいし……………」

ピクリと住田のこめかみが動き、カオリが前述した通りの、寂しい頭部よりのぞく、頭皮が輝く。

「貴様あ〜、自分の立場が分かっていないようだなあ〜」

憤慨した住田が下品な息を荒げ、カオリを押し倒さんと突撃する！

「お〜つとお、ちよつと待った!〜!」

「ぬっ？」

住田が反応した先は外へと通じる窓。

その大きな窓をご丁寧に向け、ひよいとブルー&ホワイトのロボツトが乗り込んで来るではないか。

「貴様は……ロボットになったという、鳥羽かあ」

「へへ、俺のスピーカーは高性能でね。あんたの邪まな野望を聞き取って、録音もしておいたぜえ」

「んなつ、何だと……」

「立場の弱い生徒に、理不尽な権力翳すのは良くねえよなあ」

「ぬ、ぬうっ……」

わなわなとろたえる住田。

住田は否応なく悟った。チエックメイトである。と。

「観念しな。力づくでは俺が100%勝つぜ？」

トドメの一言を言われた。

噛み締めた唇を震わせ、住田教諭は脱兎の如く、この場から消え去った。

「ちくしょーっ！ 女子高生のお嫁さんが欲しかったんだーい！」

哀れ。廊下を駆けながら、叫び、住田は泣く泣く職員室へと逃げ込むのであった。

「はあ〜。助かったあ〜」

安堵の息を排出するカオリ。

イエーガードはしょうもない住田の野望を嘲笑った。

「へっ、都合のいい他人なんか求めやがって……。イイ大人が下らねえ。人ではなく、玩具を欲しがる子供の方がまだ人間なつてらあ〜」

ふと、現在時刻を体内時計でチェックするイエーガード。確認したところによると、次の授業まであと数分という時刻であった。

おまけにバッテリー残量も大きくすり減らしている。

なので、彼が取る行動は1つだ。  
教室へ急行し、充電をする事。

「やべえ、急げ、急げえ！」

慌ててジェット機形態へ変形し、すぐさまこの場から青&白の機影の姿が消えた。

カオリは呆然とつつ立っている。

やや恍惚気味な顔色で……………。

「やだちよつと……………カッコイイじゃん……………」

そう、カオリの頬は紅く照っていた。

その後も性別問わず、困っている人が居たら人助けをした。  
面識もなければ、親しくも無い相手に対しても助けた。  
何でも出来るし、労力も対して掛からないからこそ出来たのである。

やる事成す事上手くいくと、気分が良い為、ますます良い事をし  
たくなった元・シヨウなのであった。

そして、あつという間に放課後を迎えた。

「あゝ、今日は沢山良い事したなあゝ」

イエーガードは教室内のコンセントプラグを繋いで充電「食事」  
エネルギー補給を行っていた。

人間よりも疲労度・消耗度は低いとはいえ、有限エネルギーで動  
いている以上、エネルギー補給は必須。

小まめに行うイエーガードであった。

その様子を隣に居るケンタロウが淡々と眺める。

「どんな気分なんだ？ それ？」

「んあ？ 充電の事か？ 何て言えば良いかな……………？ 体に良い温  
泉に入っている気分？ つつーのかな？ 表現し難いや」

「そうか……………。こちらとしても想像し難いものだな」

「だろうなあ」

興味・質問ラッシュも止み、いつも通りの教室での風景。イエー



ガード（シヨウ）とケンタロウの他愛の無い会話であった。彼らの居る教室へパンドラが来る。

ハンカチを拭き終え、スカートのポケットへ収納。パンドラはトイレから戻って来たか、汚れた手を洗ったらしい。

「あ、鳥羽君に感想でも聴いておこっかな？」

ふと、そう思ったパンドラは教室内のロボットと野球部生徒の所へと向う。

が、そこへ。

猛牛の大群かと云わんばかりに、女子生徒が彼女を横切り、猛烈な勢いで、通過。

その面々は、

不良に絡まれていた巨乳少女「メグミ。

重いアンプを運んで貰った少女「マコト。

キモいハゲ教師に結婚を迫られたギャル風少女「カオリ。

以上の3人であった。

「ぬおおおおおおおっ！ 何だこりやあ！？」

何より一番驚くイエーガード。

「ん？ こいつら……確か、俺が助けた奴か……。そいつらが一体何の用だあ？」

顎を摘み、疑問を中枢部より発するイエーガード。

対し、3人の女子生徒は頬を赤くしており、何処かもじもじした雰囲気。

それはまるで。

「超惚れた。ロボット、あたしと付き合え！」

上から目線気味に、鼻を突き上げてカオリは堂々と宣言。

「はあ？」

唐突に放たれた、想像だにしていなかった言葉に、イエーガードやケンタロウ達他の生徒達は呆気という空間に閉じ込められた。

しかし、この呆気はまだまだ続く。

今度は控えめな巨乳少女「メグミが口を開く。

「あの……運命感じちゃいました。その……ずっと、私を守って欲しいです……」

「おいおいおい……」

イエーガードは「それは無いだろ」とさり気無く突っ込む。

周辺の人物も同様で、さっぱり白けている。

「気味の親切心に感動した！ あたしの人生のパートナーになってくれ！」

「うわ、こいつもかよ……」

頭が痛いという感覚など、ロボットであるイエーガードには存在しない。だが、元人間であるが為、人間的な、頭が痛いですというリアクションを示すのであった。

彼女らが一斉に好意を伝えに来た。

困惑するロボット・イエーガード。

「ちょ……。俺、元人間だけど、ロボットだぞ！ もう一度言っけど、ロボットだぞ!？」

だが、彼女らは退く事はなく、真剣な表情をしている。

そんな状況下でも悠々とパンドラは板ガムを口へスロット・インする。

「わお、アンビリバーボー……」

渋い顔で顎を摩るケンタロウ。

「まさか、こんな事があるうとはな……」

思わず、一步後退。

圧倒されてしまうイエーガード。

「ちょ、ロボットが女にモテて……。ハーレムになっていいのかあつ……!?!?!?」

突っ込み叫ぶ元人間のロボット。

……画して、ロボット・イエーガードのハーレム学園生活が始まったのであった。

かどつかはまだ分からない。

## 第1話

1

「ま、そこそこかあ」

左右へ髪を分けた少年・【鳥羽匠（＝シヨウ）】はしけた顔で返却された答案を眺めた。

とぼとぼと歩いていき、己の椅子へと着席。

一息つくシヨウの後席の、【大守憲太郎（＝ケンタロウ）】がシヨウの答案を覗き込む。このケンタロウという男、短髪・大柄で筋肉質な男だ。

「ほお、68点か」

「平均前後ぐらいの点数だな」

「赤点じゃないだけいいじゃないか？」

「まあな。……にしてもさあ、ケンタロウ、勉強なんて不毛だと思わね？」

「どういう意味だ？」

「言っちゃあ何だけど、人間って忘れる生き物じゃん？ どうせ忘れるのに何でイチイチ覚えなきゃいけないんだろうって話」

太く、引き締まった両腕を組んで短髪の男、ケンタロウは首肯。

「……言われてみればな」

「まあ学校のテストなんて別に満点採らないと殺される訳じゃないけどさ。……けど、そもいかない事もあるからなあ」

「例えば何だ？」

「大人になって働いている時とか？ そりゃ、社会人が失敗なんかしちゃ困るのは分かるけどさ、完璧な人間なんていねえだろ。無理難題だと思っただよなあ」

「……そうだな。俺の兄も新社会人やっているが、理不尽に怒られる毎日だそうだ」

しみじみとケンタロウは納得。両目を閉じる。

「うへえ、想像するだけで寒気がするよ」

シヨウは舌を出し、苦い顔となった。

「あと、好みのタイプとかもそうだな。よく女とかが言うだろ？ 『金持ち生まれで、勉強もスポーツも出来る、性格のいいイケメンが欲しい』とか……。逆もまた然りで、『身も心も美しく、自分に尽してくれる女が欲しい』とかそういう部類の話だ」

今度はケンタロウの主張にシヨウが合意。

「イヤだよなあ、そういう、他人を品定めする考え方……。そういうのがあるから、恋愛なんかしたくなくなる。ま、したくてもどうせ俺らなんかモテないけどなハハハ」

自虐と言う名の失笑をうつすらと落とすシヨウ。

「どいつもこいつも、他人に求めるハードル、高過ぎんだよな。他人の事言えねークセしてよお」

シヨウはそのまま、ぼんやりと薄汚い教室の天井を眺めた。

不敵に笑み、冷笑で返すケンタロウ。

「……御尤もだ。……しかし、悲しかな現実、そんなクソ共に認められないと生きていけない……。上の立場の人間の理想通りの人

間にならなくては金も飯も手に入らん」

「あゝあ、いつその事、ロボットにでもなれたらなあゝ。完全に記憶出来るし、プログラム通りに動けるし、身体能力も段違いだし、ヒゲも剃らなくてイイし、健康の為に不味い野菜とか食わなくて済むし……」

「ハハハ、ロボットか……」

シヨウは下らない戯言を意図して言った。

ケンタロウも適当にでっち上げた夢想だと判っている為、失笑に付き合った。

しかし、冗談では無いと思っている人間もいた。

「んじゃ、ロボットになってみる？」

「は……？」

割り込んで来た気だるそうな印象を受ける口調の女子の声。

それはクラスメイトの【要パンドラ】によるものだった。

ダウンナーな雰囲気で、いつも目を半分閉じて眠たそうな表情をした少女。

パンドラという変わった名前をしているが、それは彼女の祖母が英国人である〃外国人の血と名残を持つ所以なのである。

クォーターではあるが、英米人の血の方が濃かったようで、髪は金髪。目は碧い。

その長い金髪をツインテールという髪型にしている少女である。

「あたしのお爺ちゃん、人間がロボットになれるマシーンを作ったからさあ」

「本当かあ？ からかってるだけだろ？」

ジトツと両目を細め、シヨウは疑いの眼を向ける。

「冗談半分ではざいた戯言など間に受けているのだろうか？」

シヨウは真偽を確かめてみた。

「ううん。本当。知ってるでしょ？ あたしのお爺ちゃんが科学者

だつて事」

「いやまあそうだけど、流石に人間がロボットになる技術つてのは  
ブツ飛び過ぎじゃね？」

「かもね……。だつたら、試して見る？ 今日ウチに来なよ」

涼しい顔でパンドラは言つてのけた。

それはまるでそよ風のように……。

「場所、分かるでしょ？ 東公園の向かいにあるトコ」

「お、おう……」

シヨウはぼかんと間抜けに口を開けたまま、硬直。

パンドラは逆にのほほんと自分の席へ戻つていった。

2

日は暮れていき、放課後となつた。

「シヨウ、お前家の家に行くのか？」

荷支度を整え、立ち上がったケンタロウはシヨウへ質問。

「ああ、一応確かめておきたいからな。それに、研究所つて面白そ  
うだし」

「……そうか。じゃあ明日、研究所の事話してくれよ」

「お前は行かないのか？」

「ああ、野球部があるからな」

「そつか、明日の土産話、楽しみにしているよ」

「ああ……」

そう言い残し、双方は背を向け、反対方向へ歩んだ。

二人共、完全に真に受けていない。

面白半分である。

どうせ、人間がロボットになどなれる訳がない。

そう思い込んだまま、各々の目的地へと足が進んでいったのであ  
った。

シヨウはゲタ箱へと到着。

「あれ？」

意外も……要パンドラがゲタ箱に待機していた。

「行こっか」

「俺を待ってたのか？」

「うん。いけない？」

パンドラは瑞々しい碧眼を上目遣いし、シヨウの顔を覗き込む。

「……いや。現地集合かと思って」

「どの道、同じ場所行くんだしいイジャン？」

「まあな」

「それに、女子一人で帰るのは心細いから……」

長い睫毛のある瞼を閉じ、途単にしおらしい表情で、パンドラは  
呟く。

シヨウは意外に思った。

もつと、クール＆ドライな人物かと思っていた故に。

「分かった。一緒に行くか」

「うん……」

パンドラはポケットからスティックキャンディーを取り出し、口  
へ啜えた。

前髪を左右へ分けた少年と金髪ツインテールの少女は学校を後に  
した。

シヨウはぼんやりと脳裏で独り言を呟く。

もしかして、付き人・護衛役目的で俺を呼んだのかあ？

それとも、俺に好意を……って、それは流石にねえな。

だって、女なんっーもんは金持ち生まれで、勉強もスポーツも出  
来る、更に自分にだけ優しいイケメンが欲しい生き物なんだから。

否定はしねえさ。

けど、生憎俺はそんな人間像にかすりもしねえし。

平凡な環境に生れたそこそこ人間だ。

ま、こいつ要パンドラさんは優秀な科学者の孫娘。

大層なエリート様と知り合う機会なんて幾らでもあるんだろうなあ。

オマケに美人だ。

俺なんか気にするまでもなく、玉の輿のオウジサマをGET出来そうだな。

「んお？」

呟きながら、シヨウはあるモノを目に入れる。

あまり見たくないモノ〃虐めの場面である。

遠目で具体手にどんなやり取りされているか分からないが、複数の大柄でチャラチャラした感じの男3〜4人が小柄な男子生徒を囲み、圧力を掛けていた。

カツアゲ？ 脅し？

大体そんなトコだろうとシヨウは看破。

そうした上で、我関せずと云わんばかりに。通り過ぎた。

「あるんだねえ〜、ああいうのはスルーするのが得策よね……」

口に啜えているキャンディーの棒をガタガタ動かしながら冷然とパンドラは虐めの光景を見送った。

「ロボットになったら、虐められっ子を助けたり出来んのかなあ〜」

ぼつりと雲に淀んだ天空を見上げ、シヨウは物思いに耽ってみる。

「鳥羽君って、ヒーローになりたいの？」

「う〜ん、どうだろう？ 正確にはそういう心が“あった”んじゃない？」

ね？ ほら、男って小さい時、殆どの奴が特撮ヒーローとかロボットアニメとか見るじゃん？」

「らしいね……」

「その時はそういった作品に感動して、自分もそうなりたいと思うんだよ。……けど、現実にはヒーローのように強く無いので、悪い奴を倒す力が無い。だから、ヒーローになる事をいつの間にか諦めてしまっただ」

「ふうん、そっか……」

「女の要には分からなかったかな？ あ、差別的に受け取ったのな



ら、誤つとく」

パンドラは眉間をピクリとも動かさない、クールビューティーフェイスのままだ。

つまりは、表向き、不快な感想は無い。

「いや、分かるよ。何となく。悪い奴、ウザイ奴がのうのうと生きているのはイヤだし。でも、あたしも鳥羽君同様、弱いから立ち向かえないけどね」

「まあ、普通そうだよ。ん？ 今思ったけど、お前はロボットになりたいと思わねえの？」

「うん。思わない」

キツパリ言つてのけた。

「だって、ロボットになるとお菓子の味、感じられないじゃん？

あたし、お菓子食べている時が一番の至福なんだよね」

「ああ、そういう理由かあ」

等々と、淡々と話しながら、二人は徒歩を続ける。

考えてみれば、シヨウはパンドラとここまで長く会話したのは初めてだったかもしれない。

パンドラと親しくなりたかったが、臆病で出来なかったという訳じゃない。

嫌悪し、避けていた訳でもない。

特に興味ある存在ではなかった。だから、積極的に接しようと思わなかった。

そんなシヨウであったが、パンドラと話していくうち、「こいつ、イイ奴なんだな」と位は思うようになった。

3

のんびりゆつたりと歩いていくうち、パンドラの自宅＝要ラボラトリへ到着。

パンドラに誘導され、シヨウは室内へと進行した。

どういう意図で造られたかなど不明な機器が乱雑に並ぶ空間。

これが研究所かぁ。と、感銘に浸るシヨウ。

まるで秘密基地探険している気分。

シヨウは無意識的に童心に返っていた。

研究所の中で1人、黙々と作業をしている人物を目にする。

その人物は老人男性はむくりとこちらへ向き、曲げた腰を起こした。

「おお、パンドラか。お帰り」

「お帰りー、お爺ちゃん」

「む？ その隣に居るのは……？」

爺にとつて、見知らぬ存在は男子生徒はシヨウ。彼の姿をDr要はメガネを掛け直し、凝視する。

「あ、ども、俺鳥羽シヨウです。ロボットにさせてくれるってお孫さんが言うので……来ちゃいました。タハハ……」

咄嗟にしどろもどろ紹介・来客の旨を伝えるシヨウ。

やべ……。愛しの孫娘に手を出した不届き者とか思われたのか？

一応、正直に理由を言ったんだけど……どう出るんだこの爺さん。

シヨウは緊張と言う息を呑む。

「おお！ そうだったのかぁ！ 嬉しいのお」

ガバツと食らいつくようにDrはシヨウの両手を握り、握手。

Dr要は非常に高揚しており、実に嬉しそうな笑顔をしていた。

「ど……どうも」

いちやもん付けられて追い出されなくて良かった。

取り敢えず、友好的に接してくれてほっとするシヨウ。

「良かったね、お爺ちゃん」

「おお、パンドラ、見つけて来てくれて有難う」

「いやいや……」

パンドラは眠たそうな顔のまま、ふふんと艶やかな唇を曲げ、笑んだ。

「……ところで、シヨウ君だったかな？ 何故君はロボットになり

たいんだね？」

一転、真面目な顔立ちを作るDr要はシヨウをじつと見つめる。

「そうっすね……。何っつーか、人間である事が馬鹿馬鹿しく思ってたからなんっすよ」

「ほお、馬鹿馬鹿しい……。とな？」

「人間って不便じゃないですか。覚えなきゃいけない事を忘れてしまったり、健康の為に身体を鍛えたり、食事バランス考えなきゃいけないかったり。要らない毛とか生えて、その度に剃らなきゃいけないかったり……。そこで俺、思ったんっすよ。人間の……。今の俺の心のまま、肉体がロボットになれば、都合いいよなあ……。って」

「ナルホド……」

こくこくと、Drは首肯。

「でも、そんな都合のいい事なんか、出来ないっすよねえ」。アニメじゃあるまいし」

へらへらと頭を掻いて笑うシヨウ。

そろそろ冗談ゴッコは辞めておくかと、現実的な言葉で刺しに掛かった。

「いいや。出来るとも。それがしたくて、君はここへ来たんじゃないのかね？」

平然と。そう、実に堂々と博士は言っただけ。

寧ろ、シヨウが異端だと云わんばかりに。

「ほ、本当にロボットになれるんっすか？」

「当たり前じゃないか。現に私も一回ロボットになったよ」

「……で、元に戻ったんっすか？」

「うむ。まだこの技術は発展途上でね。もしもロボットの身体が故障した際、私自身がロボットだったら修復出来ないからね。私は人間である必要があるのだよ。人間の魂を転移したロボットが生存し続けられるように見守る為に一応ね……」

「そっか……。やっぱ、俺実験台なのかあ。巧い話だと思ったけど」  
頭を落とし、悄然。

シヨウは腐った笑いを溢す。

「まあそう、腐らないでくれたまえ。今のところ、この実験に欠陥はないのだから」

「そうなんっすか」

「うむ。まあ何はともあれ、試してみたまえ。気に入らなかつたら、元に戻してあげよう。大丈夫。お金も何も取らないよ」

「はあ……」

「では、早速転移後のボディを選んで貰おうかね？」

「ボディ……。どんなヤツだろ？」

3人は肉体転移先〓ロボットの格納庫へと移動。

そこにあつたのは2機の人型ロボット。

大きさは180センチそこの成人男性クラスの背格好。

1機はブルー&ホワイトの翼を持ったロボット。

背中にキャノピーらしきものが畳まれており、ジェット機に変形しそうな風貌。総じて、細身で、スピーディな印象のフォルムである。

2機目はブラック&グリーンのボディカラーリングで、重厚な腕や脚にホイールを持つ、装甲車に変形しそうな、マツシヴな体系のロボットである。

「へえ、大きさは人間ぐらいなんだな……。つつても、俺よりデカいけど」

感心しながら、2機のロボットをまじまじと眺めるシヨウ。

「まあ、巨大だと生きていく上で何かと不便だからねえ。どちらか好きな方を選びたまえ」

「そうだなあ、うーん……。んじゃ、青いのにしよっか。個人的にこっちが格好いいと思うし」

「よし、では転移装置へ座りたまえ」

「うーっす」

気楽なノリで博士が示した椅子〓魂をロボットへ転移する装置へと向ったシヨウ。

「それでは……転移開始！」  
博士は発動レバーを引き、シヨウは電撃を浴びる。  
「ウオオオオオオッ！！！！」  
スツと楽になる感覚……重荷を降ろす感覚……。  
そのような感覚に浸るうち、シヨウは意識を失う。  
そして、次に彼が目覚めると。

4

翌日。

ケンタロウはいつも通りに登校し、野球部の朝練を終了し、己の教室へと向った。

「……そついや、シヨウの奴、どうなったかな？ 失敗して髪の毛チリチリになったとか、そんなトコだろうか……？ 状況によって笑うか、慰めるかでもしておこうか」

ぼんやりと呟き、教室のドアを開けるケンタロウ。

「んん？」

自分の前の席〓シヨウの席は空席。

更に周囲を見回し、誰かと話でもしているか確認してみるケンタロウ。

だが、教室内にシヨウらしき存在は確認出来ない。

机横のフックを見やるが、シヨウの鞆が掛けられていない為、まだ来ていないと分かった。

「珍しいな。あいつ、帰宅部だけど、早く学校に来る部類なのだが……？」

ケンタロウは両腕を組んで、表情を渋くする。

「うお〜い、窓開けてくれ〜、窓！」

「んむ？」

ケンタロウ他、教室内の生徒はこの大声に注目する。

「この声は……？」

声の先は窓の外。ケンタロウ達が見やった先には通常ならあり得ないものが、浮遊していた。

小さなジェット機……。ブルー&ホワイトの飛行メカである。

「この声はまさか……」

ケンタロウはこの声に聞き覚えがある。

自分の隣の席で、よく話す人物〓シヨウの声・口調と全く同一なのである。

「そ、そのまさかだ！」

ケンタロウは大体の事情を察し、黙々と窓を開けた。

すると、小さなジェット機は開いた窓へ飛び込み、両翼を閉じて、教室内へ。

教室内の上空で小さなジェット機は変形を始め、人型ロボットへと変形を遂げた！

ズシンと、金属音を立て、ブルー&ホワイトのロボットは教室内へ堂々と立つ。

「うーっす、ケンタロウ。俺だよ、俺。『元』鳥羽シヨウな！」

ケンタロウをはじめとしたクラスメイト一同は愕然と黙り込む。

先程の発言を考えて、クラスメイトの鳥羽シヨウが自分達の目の前に要るロボットになったらしい。

そんなバカな。といったリアクシヨウを通り越して、絶句する一同。

そこへ淡々とロボットになる事を手助けした人物〓要。パンドラが悠々と教室へ足を入れる。

「おっは〜。……って、あれ？」

無性に静かな空間。

いつもなら、休憩時間と言うのは生徒同士が雑談している事が多いので、基本やかましいものだが、そうでない為、違和感を覚えるパンドラ。

だが、絶句している皆が注目しているモノが何か分かったら、すんなりと納得した。

「皆、驚いた？ あたしのお爺ちゃんの発明を使って、鳥羽君はロボットになったの。鳥羽君、今ここでロボットとなって改めた名前を発表しなよ」

「おお！ そうだな！ いいか？ 皆、よく聞け！ 俺は『元』鳥羽シヨウ。そして、今の俺は……カッチョイイ、ヒーローロボット、『イエーガード』だ！」

ロボットアニメのような決めポーズを披露する！

「おお〜！」

と、圧倒される生徒達。

今度は節操なく、パンドラへと注目する生徒一同。

「マジで？」「スゲー！」

などと、騒ぎ立てる。

パンドラやロボットと化したシヨウに群がり、マスコミの如く、問い質す生徒達をよそに、ケンタロウだけは愕然と往生。

「マンガじゃあるまいしと、冗談だと思っていたのだが……。信じられん」

そんな中、ロボットとなったシヨウ・イエーガードはクラスメイト達の質問ラッシュをへらへらとした態度で受けていた。

「親は何とも言わないの？」

「ああ、この姿だと何でも出来るんだよなあ。勉強も一度教科書見たら教科書の内容、全部完全暗記出来るし、身体能力もケタ外れ！ オマケにさつき見たように空も飛べる。だから、親としては便利になって助かるってさ」

「あっさりだなあ〜」

「ま、親としては生きていく上で必要な能力が備わって良かった。一人前の社会人として生きていけそうって思ったらしいぜ？」

「そっかあ。でも、ロボットだと子孫残せないんじゃない？」

「元々、結婚してガキ持つなんて俺には無理だよ。だから、気に病む問題じゃねえ」

「飯……っつーか、エネルギー補給ってどうすんの？」

「それはな……」

イエーガードは腰アーマーのハッチを開き、そこから一般に出回るあのコンセントプラグ及び、そのケーブルを取り出す。

「こいつを使って充電するんだ」

「そっか。それじゃあ、味覚は感じないんだ」

「ロボットだからな。でも、何でも出来るメリットに比べりゃ、こんなデメリット大した事ねえよ」

等と、質疑応答が飛び交った。

5

画して、鳥羽シヨウの心を持ったロボット・イエーガードの学園生活が始まった。

「ハッハッハ！ 分かる！ 分かるぞ！ その問題イ！ 安い程に！」

如何なる授業も高性能AIを持つイエーガードの敵ではない。

全ての授業で堂々と積極的に問題を解き、教師を啞然とさせた。

数学ではあり得ない速さで正解を導き、

歴史ではこと細かに歴史背景・人物の動向を述べ上げ、

英語では速効で和訳し、高性能AIの実力をフルに発揮した。

他の生徒達は自分達に回答の矢が当らず、「こいつが居て良かった」と、心底嘔み締める事態。

イエーガードの猛威は授業中だけで納まるほどの大きさではなかった。

休憩時間での出来事である。

体育館裏にて。



「うつせえな、おっぱい触らせろよ！」

不良男子達5人が、巨乳で清楚な印象の女子生徒<sup>メグミ</sup>【牛村恵美】を囲んで、破廉恥な行為を強要させようとしていた。

「知ってるかあ？ エロイ体の女って、エッチしたい本能があるからバインボインのエロイ身体になるんだぜ？」

「フー事だ。お前、本当はエッチがしたいんだろ？ なら、俺らとヤとっぜ？」

リーダー格の男が詰め寄り、メグミを壁へ押し付ける。

「ちよつと待ったあ！」

急接近する飛行音。上空より、イエーガード・ジェットモードが飛来。

「チエーンジ！ つとあ！」

小型ジェット機が空中で人型ロボットへと変形し、降下したまま、不良達を蹴り飛ばした！

「都合のいい他人を保有したがるクズ共め！ このイエーガード様が成敗だ！」

スタツと着陸し、フェイティングポーズを構えるイエーガード。

襲われる直前だったメグミは自分を救ってくれたロボットを唾然と見つめる。

不良達は暴力で他者を圧倒出来る存在そして、恐れられる生き物。身体もタフであり、壁に打ちつけられた不良達は短時間で再起した。

「こいつは……ロボットになったって噂の奴か」

「んにやる、ヒーロー気取りかよ。マジダセエ」

「ハッ、弱い者虐めしているお前らの方がダセエよ。百億倍な！」  
端整な鋼鉄の顔を上へ突き上げ、イエーガードは嘲笑う。

「何っ？」

「んだとこの野郎！」

リーダー不良が吼え上げ、不良連中は激昂。

イエーガードへ飛び掛った。

「へへ……キャモン、キャモン！ お前らなんか束になっても倍になっても俺には勝てないモンねー！」

くいくいと、人差し指を内側へ扇ぎ、挑発的仕草を採るイエーガード。

戦闘が開始された。

「うおりゃあつ！」

青&白のロボットの素体フレームがしなり、豪傑な拳で不良1人を殴り飛ばす！

不良は流星の如く、吹っ飛び、壁へめり込んで気絶。

目を白くし、舌とヨダレを垂らす。

「調子に……」

「乗るなよっ！」

左右より強襲するチャラチャラした指輪の付いた拳。

不良2人がイエーガードを挟み撃ちに！

しかし、イエーガードにうるたえる様子は微塵にもない。

「フフ、センサーキャーッチイ！」

ススス……。イエーガードの両腕が左右へしなやかに回る。

ガシッ！

イエーガードの両手が不良のナックルを容易に受け止めた！

「何だと！」

ロボットが相手とはいえ、今まで喧嘩で敗北した事などない不良共にとつて信じ難い事実。自慢のパンチを受け止められた事に血の気がサアツと退く。

「こつこつこのを赤子の手を捻るって言うんだらうなあ。あゝら、よつとお！」

イエーガードはお手玉感覚でさくつと掴んだ拳の先にある不良2名を放り上げ、両者を激突させた。

鈍いクラッシユ音を響かせ、不良2人は失神状態で地面へと墮ち

た。

「こんのお〜」

最後に残ったリーダーとサブリーダー不良2人が後方より、金属バットを持って殴り掛かる。

流石に金属なら倒せるだろうという戦術を行使したのである。

「へっ」

それでも、イエーガードは鼻で笑う。

……フェイスデザイン上、鼻は無いが。

「バーカ」

腿と足裏のバーニアが噴出！

突然、上空へ飛び、2人の攻撃をすり抜けた。

不良リーダーと？2は唐突にターゲットに逃げられた為、足元がふらつく。

その様子をイエーガードは空中で高見の見物。

「さあてと……」

イエーガードは左腕のマシガンを展開し、構える。

「……って、流石にマシンガン攻撃は拙いか。一応、殺さない方がいいよなあ〜。だったら！」

脚部をフレキシブルに稼働させ、踵を大上げする！

そして、踵はハンマーの如く、不良リーダーの頭部を強烈に撃ちつけた。

最後にもう1人を回し蹴りでノックアウト。

僅か1分足らずで、不良5人をこてんぱんにした。

まあ、ロボットなので、こんな芸当出来て当然では有るが。

「ハハハッ！ ざまーみるってんだ。いやあ、良い事するって爽快だなあ。……いや、良い事出来る力があるってのが最高に気分がいんだらうな〜」

ハッと、まだやらねばならない事があると気付くイエーガード。

「……あ。待てよ。後で教科書破られたり、仕返しされんのは困るな……。だったらそうだな……」

イエーガードは失神中の不良達のズボンを脱がしていく。

「こういうの、ぶつちゃけ、やりたくないけど……。釘は打っておかないとなあ〜」

イエーガードは下半身丸出しの不良5人に恥ずかしいポーズに相当するものを取らせ、放置し、消え去った。

置手紙を残して。

その置手紙には

お前らのチンモ口画像を俺は保存した。

ネットに晒されたくなければ、俺に逆らう事もセクハラも弱い者虐めも恐喝もするな。Byイエーガード。

と、記されていた。これ以降、不良達の横行は途絶えたそうだと。

「さあて、次のパトロール、パトロールとお！」

ジェット機形態のイエーガードは学園内を縦横無尽に飛び回り、己の力を示せる場を求め回っていた。

音楽室へ通じる渡り廊下。

「う〜ん、重い。もう限界〜っ」

軽音楽部の女子達がアンプを床に置き、疲労を示す。

どうやら、アンプを運んでいたが、重過ぎて、彼女らの腕力・体力に限界が来たようだ。

「よう！ 大変そうだな！」

そこへ小型ジェット機「イエーガード」が到来。

「あ！ ロボットになったって噂の人……。？……」

「イエーガードって呼んで欲しいんだけどなあ〜。まあいいや、俺が代わりにそれ、持って行ってやるよ。チェインジ！」

軽音楽部の女子達へ変形しながら、降り立つ。

「こいつ、アンプも持っていきたいんだろ？」

「あ……う、うん」

部長で、ウエーブがかったロングヘヤーの【音原真琴<sup>マコト</sup>】は驚きながら、首肯。

噂で聞いてはいたが、いざ本物のロボットが目の前に居るとなると、目を丸くする軽音楽部の面々であった。

「ありがとうございます」

マコトをはじめとした、軽音部の女子達は飛び去って行ったイエーガードを見送った。

無事、重いアンプを送り届けたようだ。

「うわあ〜。本当に校内を飛び回っているよ……」

唖然とイエーガード・ジェットモードを眺める副部長のマツリ達。

「……格好いい……」

「え……?」

部長のマコトがぼそつと放った言葉にマツリ達他軽音部員は仰天。  
ドン引きする。

生徒指導室。

チャラチャラした……所謂ギャルに該当する女子生徒・【姫野香<sup>カオ</sup>織<sup>リ</sup>】は30代男性教諭の住田に呼ばれ、話をしていた。

「姫野カオリ……。はつきり言って君は成績が酷過ぎる。このままでは進級は無理だな」

「げ、マジっすか……」

「だが、勉強しろと言っても、君は聞かんだろ。そこでだ」

「?」

赤く染められた派手な髪を揺らし、カオリは首を傾げる。  
「先生と……結婚してみないか? お前は生徒を辞めて先生の奥さんになるんだ。どうだ?」

「はん、ナンパっすか?」

「嫌なのか? 勿体無いぞ? 先生は未来永劫安泰の公務員だぞ? 公務員と結婚出来るなんてオイシイ話、又とないぞお〜」

住田はぐいぐい顔を近づけ、圧迫させながら、言い寄っていく……。

「いや、公務員と結婚するのはオイシイと思うけど……。先生は好みじゃないや。ハゲてるし、キモいし……。」

ピクリと住田のこめかみが動き、カオリが前述した通りの、寂しい頭部よりのぞく、頭皮が輝く。

「貴様あゝ、自分の立場が分かっていないようだなあゝ」

憤慨した住田が下品な息を荒げ、カオリを押し倒さんと突撃する！

「おゝつとお、ちよつと待った！！」

「ぬっ？」

住田が反応した先は外へと通じる窓。

その大きな窓をご丁寧に開け、ひよいとブルー&ホワイトのロボツトが乗り込んで来るではないか。

「貴様は……ロボットになったという、鳥羽かあ」

「へへ、俺のスピーカーは高性能でね。あんたの邪まな野望を聞き取って、録音もしておいたぜえゝ」

「んなつ、何だと……。」

「立場の弱い生徒に、理不尽な権力翳すのは良くねえよなあゝ」

「ぬ、ぬうっ……。」

わなわなとろろたえる住田。

住田は否応なく悟った。チエックメイトである。と。

「観念しな。力づくでは俺が100%勝つぜ？」

トドメの一言を言われた。

噛み締めた唇を震わせ、住田教諭は脱兎の如く、この場から消え去った。

「ちくしょーっ！ 女子高生のお嫁さんが欲しかったんだーい！」

哀れ。廊下を駆けながら、叫び、住田は泣く泣く職員室へと逃げ込むのであった。

「はあ〜。助かったあ〜」

安堵の息を排出するカオリ。

イエーガードはしようもない住田の野望を嘲笑った。

「へっ、都合のいい他人なんか求めやがって……。イイ大人が下らねえ。人ではなく、玩具を欲しがる子供の方がまだ人間なってるあ〜」

ふと、現在時刻を体内時計でチェックするイエーガード。

確認したところによると、次の授業まであと数分という時刻であった。

おまけにバッテリー残量も大きくすり減らしている。

なので、彼が取る行動は1つだ。

教室へ急行し、充電をする事。

「やべえ、急げ、急げえ！」

慌ててジェット機形態へ変形し、すぐさまこの場から青&白の機影の姿が消えた。

カオリは呆然とつつ立っている。

やや恍惚気味な顔色で……………。

「やだちよつと……………カッコイイじゃん……………」

そう、カオリの頬は紅く照っていた。

その後も性別問わず、困っている人が居たら人助けをした。

面識もなければ、親しくも無い相手に対しても助けた。

何でも出来るし、労力も対して掛からないからこそ出来たのである。

やる事成す事上手いくくと、気分が良い為、ますます良い事をしなくなった元・シヨウなのであった。

そして、あつという間に放課後を迎えた。

「あ〜、今日は沢山良い事したなあ〜」

イエーガードは教室内のコンセントプラグを繋いで充電⇨食事⇨エネルギー補給を行っていた。

人間よりも疲労度・消耗度は低いとはいえ、有限エネルギーで動いている以上、エネルギー補給は必須。

小まめに行うイエーガードであった。

その様子を隣に居るケンタロウが淡々と眺める。

「どんな気分なんだ？ それ？」

「んあ？ 充電の事か？ 何て言えば良いかな……？ 体に良い温泉に入っている気分？ つっーのかな？ 表現し難いや」

「そうか……。こちらとしても想像し難いものだな」  
「だろっなあ」

興味・質問ラッシュも止み、いつも通りの教室での風景。イエーガード（シヨウ）とケンタロウの他愛の無い会話であった。彼らの居る教室へパンドラが来る。

ハンカチを拭き終え、スカートのポケットへ収納。

パンドラはトイレから戻って来たか、汚れた手を洗ったらしい。

「あ、鳥羽君に感想でも聴いておこっかな？」

ふと、そう思ったパンドラは教室内のロボットと野球部生徒の所へと向う。

が、そこへ。

猛牛の大群かと云わんばかりに、女子生徒が彼女を横切り、猛烈な勢いで、通過。

その面々は、

不良に絡まれていた巨乳少女「メグミ」。

重いアンプを運んで貰った少女「マコト」。

キモいハゲ教師に結婚を迫られたギャル風少女「カオリ」。

以上の3人であった。

「ぬおおおおおおおっ！ 何だこりゃあ!？」

何より一番驚くイエーガード。

「ん？ こいつら……確か、俺が助けた奴か……。そいつらが一体何の用だあ？」

顎を摘み、疑問を中枢部より発するイエーガード。



対し、3人の女子生徒は頬を赤くしており、何処かもじもじした  
雰囲気。

それはまるで。

「超惚れた。ロボット、あたしと付き合え！」

上から目線気味に、鼻を突き上げてカオリは堂々と宣言。

「はあ？」

唐突に放たれた、想像だにしていなかった言葉に、イエーガード  
やケンタロウ達他の生徒達は呆気という空間に閉じ込められた。

しかし、この呆気はまだまだ続く。

今度は控えめな巨乳少女「メグミが口を開く。

「あの……運命感じちゃいました。その……ずっと、私を守って欲  
しいです……」

「おいおいおい……」

イエーガードは「それは無いだろ」とさり気無く突っ込む。

周辺の人物も同様で、さっぱり白けている。

「気味の親切心に感動した！あたしの人生のパートナーになって  
くれ！」

「うわ、こいつもかよ……」

頭が痛いという感覚など、ロボットであるイエーガードには存在  
しない。だが、元人間であるが為、人間的な、頭が痛いですという  
リアクションを示すのであった。

彼女らが一斉に好意を伝えに来た。

困惑するロボット・イエーガード。

「ちょ……。俺、元人間だけど、ロボットだぞ！もう一度言っけ  
ど、ロボットだぞ!？」

だが、彼女らは退く事はなく、真剣な表情をしている。

そんな状況下でも悠々とパンドラは板ガムを口へスロット・イン  
する。

「わお、アンビリーバボー……」

渋い顔で顎を摩るケンタロウ。

「まさか、こんな事があるとはな……」

思わず、一歩後退。

圧倒されてしまうイエーガード。

「ちょ、ロボットが女にモテて……。ハーレムになっていいのかわつ！……!?」

突っ込み叫ぶ元人間のロボット。

……画して、ロボット・イエーガードのハーレム学園生活が始まったのであった。

かどうかはまだ分からない。

## 第2話 「取り敢えずデート」

### 第2話 「取り敢えずデート」

1

鳥羽シヨウがイエーガードというロボットとなり、学園生活を送った日の放課後。

職員会議が開かれていた。

理由はそう、生徒がロボットになってしまった件についてである。担任は保護者に電話し、保護者の意向を訊ねた。

両親によると、先行き不安な・若者に厳しいこの時代背景、我が子には生き抜いて欲しい願望がある。

その為、生き抜く為に必要なスキルが手に入るのならもはや、人間の身体を捨ててロボットとして生きていくのもアリだと結論したとの事。

それを踏まえた上での職員会議。

主な課題はこれである。

元・本校生徒とはいえ、現在はロボット。

そのロボットを学校に通わすべきか否か。

今日は様子見として学園生活も人間の時と同じように過ごさせてみたが、極端な問題は見当たらなかった。

それどころか、虐めなどの討伐<sup>二</sup>学園治安の良化しているようだ。

今のところ問題ないように思える。

生徒脅迫まがいの事を録音された為、元・鳥羽シヨウのイエーガードを退学処分したいが、出来ない住田教諭。

彼はかと言って、イエーガードを肯定したくもなかったので、黙っておくしかなかった。

一方、問題点としては学園内を戦闘機が飛び回る件。

モトのイエーガード

周囲に奇異な目で見られる事への懸念がある。  
しかし、イエーガードは戦闘機モードで登校しているそうなので、とくに世間周辺に知られているか、近いうち知れ渡るだろう。  
……まあ、あれこれグダグダと語り合った結果、「まだ様子見しよう」という話に落ち着くのであった。

2

本日は土曜日。

そう、学校へ行かない、休日である。

「はあく。何でこうなったのやら……」

天空を飛行する小型ジェット機「イエーガードは思い起こす。

それは3人の女子生徒に言い寄られた時の事だ。

「あのさあ俺、お前らに好意があるから助けた訳じゃねえんだけど」

「じゃあ。好きになって貰うし！」

ズン！ と、一歩踏み、カオリは強気に返した。

「そう言われてもなあ」

悶々とするイエーガード。

「じゃあ、今週の土日と祝日の月曜、それぞれ一日あたしら3人と一人ずつデートして貰う！ それをした上で断るんなら、断って貰おうじゃん？ マコト、メグミ、どう？」

「い、いいよ……」

大人しそうに首肯するメグミに、快活にサムズアップするマコト。

「OK！ 上等ジャンか！」

「よおし、決まりね！」

「いや、勝手に決められたんだけど……」

釈然としないまま、勝手に話を進められてしまっイエーガード。

だが、彼も圧されてばかりではない。

「うん、分かった。でもこれだけは言っておくぜ？ 俺はロボッ

トだぞ？ ラブコメみたきくと思うなよ？」

「ふん、関係ないし！」

鼻を突き上げ、カオリは一蹴し、3人へ教室から消え去るのであった。

嵐がようやく治まった……………。

メモリーより、回想を引き出したイエーガードはそのデートへと向って飛翔しているのである。

「訳分かんねえ。女なんて金持ち生まれで勉強もスポーツも出来る自分にだけ優しいイケメンが欲しいんじゃないのかよ？ ……あ、待てよ。今の俺、完璧に何でも出来るじゃんか。……人間じゃなくなっただけ。完璧に何でも出来る奴に縋り付きたいのかあ？ そういふ魂胆ならロボットを好きになるってのも納得出来るな」

高性能AIが邪推を始めた。

邪推は更に進行していく……………。

「いや、そもそも本当に好意があるかは限らないな……………。！！まさか、俺をどっかの団体に売って儲ける気か？ ……って、流石にそれは無いかなハハハ……………」

まあ取り敢えず、油断せず一日を過ごしてみよう。

鼻の下を伸ばさないでおこう。

そう決意し、目的地へと臨むのであった。

コンビ二前にカオリが待っている姿を確認。

本日はカオリとのデートとなっていた。

ジェットモードのイエーガードは着陸態勢に入る。

「よう！ 到着したぜ？ チェーンジ……………」

「あ！ 待った！」

「へ？」

イエーガードは人型モードへ変形しようとしたが、カオリの言葉を受け、咄嗟に中断し、ジェットの姿へと戻る。

「な……………何だあ？」

「変形しないで。ジェット機のまま、あたしを乗せて飛んで……」  
「はあ!？」

「ダメ……?」

突然、イジらしい表情で、カオリはもじもじし出す。

こいつ、こんなキャラだっけ? と、疑問をAI内が示すも、その要望に対し、イエーガードは答える事にする。

「うーん、難しいぞあ。だってこの形態、そんなに大きくないし。乗用車とかと比べてみるよ? 全然小さいぞ?」

「大丈夫。しっかりがみついているから……。イイじゃん?」

「いやあゝ。(どうだろう?)」

イエーガード・ジェットモードは人を乗せて飛んだ事は無い。

その為、他人を乗せる事に抵抗を示すのである。

「もし、落としても怒らないよ。だからさ……」

「うーん……。そんなに言うなら……。分かった。乗れよ」

「フツツ、そう来なくっちゃ!」

ニンマリと頬を緩め、着陸中のコックピットなど存在するスペースのない小型ジェット機の上部を跨ぎ、腰を降ろすカオリであった。両翼を両手が掴み、バイクに乗るような体制を採るカオリ。

「準備OK! いつでもいいよっ!」

「ようし、しっかり捕まっているよお! バーニア、オン! 離陸開始イ!」

バーニアを噴出させ、機体が上昇。浮かんでいく。

徐々に加速していき、天空へと飛び立った!

偶然近くに居た人々はそれを目撃し、啞然となる。

小さなジェット機に女の子が乗っていった……?

何だっただんだあれ?

……ちまちまとざわめくも、「ま、別にいいか」と、各々コンビ二へ入ったり、自転車に戻ってこの場を後にする人々なのだった。  
「ひゃあ! 気持ちイイっ!」

風圧を受け、せつかくの長い綺麗な髪を乱すカオリ。

しかし、カオリはそんな事など気にしている様子はなく、楽しそうにジェットコースターに乗っているかの如く、高揚に浸っていた。暫し、自由な空を満喫する。

ジェットモードのイエーガードは安全性を考慮し、いつもより低速安全飛行を行っている。そもそも、カオリの体重分、重くていつもよりもスピードが出せないというのもあるが……………。

その為、人間の感情機能を移転されたAIは集中し、繊細な空中安全移動作業を行っていた。

「うへえ、難しいや。安全運転つてのも……………。誰も乗せてなきゃ、思う存分カツ飛ばせるんだけどなあ〜」

はしゃぐカオリとは反対に苦悶しているイエーガードであった。その後も、色々な場所へ向った。

ゲームセンターに、アスレチックパーク等々。

ロボットと美女のデートという、シユールな光景がそこらにあった。

周囲の対応としては、ただのコスプレだという事で無理矢理通しておいた。

カオリは終始、楽しそうにしていた。

が、イエーガードは「これでいいのか？　ロボットと人間がデートなんて変じゃね？」と腑に落ちない為、どうも心の底から楽しめはしなかったのだった。

河川敷。

ベンチに腰掛けるカオリに、人型モードで精神的にくったりしているイエーガード。

「あ〜、楽しかったあ」

爽快そうにカオリは屈伸した。

「あ、そう……………」

反対にイエーガードは白けた様子で返事する。

この程度の運動で大幅なエネルギー消費はしない。

だが、人間の心が、精神的に滅入っていたのである。

「こんなに楽しい思いしたの、久し振りかも」

「あっそ……」

向こうは楽しかったそうだが、自分は楽しくなかった。

イエーガードはやる気ない返事を送る。

「あたしさ、色んな男と付き合った事、あるんだよねえ」

「何だあ、自慢かあ？」

カオリは首を左右に振り、話を続ける。

「……でも、どれも続かなかったの。全員つまらないから、別れたの」

（うわあ……ゲスだな……所謂ビッチって奴か？）

ドン引きする人の心を転移されたロボット。

「あ、でも言っておくけど、如何わしい行為は誰ともした事はないからね。如何わしい行為は社会人になってからよ」

「え？ ああそう。……まあ、子作りは結婚後というヤツだな」

「そうそう、良い事言うじゃん」

「話戻すか。付き合っていた男がつまらなかったと言ったが、具体的にどんなのだったんだ？」

「そうね……。簡単に言うと凡骨のクセに女の機嫌取る事に必死なピエロって感じ？ 使い古された、似たり寄つたりの口説き文句やデートプランとか使えない奴らだったわ。加齢臭漂う20年近く前のドラマのキャラかったの」

カオリは不貞腐れた表情で吐き捨てた。

何故、どいつもこいつも怯えるように自分に恋愛するののか？

カオリ自身は今まで付き合ってきた人間の心理は分からない。

だが、彼女というものを必死で欲しがり、必死で維持しようと思っていたのは窺えた。その姿が滑稽で、哀れで、同情心に近いもので、付き合ってみた。

しかし、単純に苦痛で退屈であった。

あたふた格好いい彼氏を演じようとされる姿がどうも息苦しかった



ただ。

「このような関係を続けてしまつては自分も向こうを苦しいだけではないか？」

「そう、思えた為、わざと嫌われるような真似をし、別れた。」

「そんな過去が、カオリにはあつた。」

「その為、人間の男なんてつまらない。」

「もう、関わりたくないと考えるようになった。」

「……だからね。ロボットと付き合つてみるとどんな感じかなあゝつて」

「ナルホドな。……でも、殆どの男はそんな事しか出来ないんじゃないかねえの？ 人間の男を悪く言つてやるなよ」

「そうね……」

「ふつとカオリは笑んで、腰を浮かし、立ち上がる。」

「ねえ？ どうだった？ 今日のデート」

「ぼんやりと夕陽を見上げている人型ロボットへ清まし顔を向ける。」

「んー、大変だったかな？ 人乗せて飛ぶ経験も初めてだったし……」

「……でも、楽しい部分もあつたかな？」

「結局どう？ あたしと付き合つてくれるの？」

「ああ、そう来るか……。と、ロボット・イエーガードが言葉を詰まらせる。」

「いやあ、改めて言うけどさ。俺、ロボットだぞ？」

「分かつてるし」

「強気な態度。ちょっとやさそつとじゃ、折れてくれそうにないぞと考える。」

「だが、決着を付けねばとイエーガードは適切な言葉を紡ぎ出す。」

「もうお前、人間に幻想抱けねえの？」

「多分ね……」

「即答しやがつた。迷いは無さそうだ。」

「俺と一緒に居ると新鮮で便利か？」

「うん……。それが？」

「そつかあ、でも悪いなあ。俺とお前は恋人にはなれねえ。所詮ロボットと人間接していけばどうせ不一致が出る。それにな……」  
「それに……？」

「俺はロボットになって、人間では出来ない事が簡単に出来るようになった。……だから、その分、より多くの人間を助ける義務があると思うんだ……。特定の人間だけを構ってはいけないんだ……」

よし！ 決まったっ！

これで納得してくれるだろう。

イエーガードは勝利を収めた。

「ふうん。ヒーロー気取りね……。分かった。諦める」

さらっと、口を動かし、浮くようにカオリは立ち上がる。

良かった。納得してくれたかと、イエーガードはほっとする。

「でも……。あたしが困った時には……。どうしても誰かの助けが必要な時には助けに来てよね」

ツンと鼻を突き上げ、すまし顔でカオリはそう言った。

まるでそよ風のように爽やかな表情だった。

向こうが笑顔で返してくれたなら、こちらも爽やかな対応をしなくては失礼と考えたイエーガードは鉄鋼の指を動かし、サムズアップを送る。

「おう！ ったりめえよお！ じゃあな！」

「うん。また学校でね」

イエーガードはダツシュ！

そのまま、ジャンプし、ジェット機形態へとチェンジ。

飛行機雲を連れて夕焼けの中、飛び去っていった。

青いボディが橙の光を浴び、青緑に見える色合いとなっている。

久しぶりに他人を乗せず、飛行している為、非常に爽快な気分のイエーガードであった。

「いやあ、人を乗せずに飛ぶって、こんなに気楽なんだなあ……。にしても俺、損な事したかなあ。あの女と恋人になった方が良かったのかなあ。でもなあ、やっぱり胡散臭く思うんだよなあ」

そう、俺。元・鳥羽シヨウは女にモテた事がない。  
理由は恐らくこうだろう。

1、特に秀でたものがない。

成績優秀・スポーツ万能・容姿端麗・金持ち生まれ。口が達者。何れにも該当しない平凡な人間だった。要するに女が自分を恋人と言う形で独占する必然性・メリットが無いんだ。

2、女にモテる努力をしていなかったから。

正確に言えば、モテる努力が非常に面倒かつ、実現が難しい。その上、自分にとってメリットがあるのか・苦勞の果てにある対価が見合うものなのか分からないから、やらなかっただけだ。

そもそも、自分自身モテたいというと、それでもないからなんだよな。

多分、彼女を持って置いた方がいい。

彼女を持っている人間の方が偉い・人間的に優れていった風潮があるような気がして、出来れば持つておくべきなのだろうか？ 程度の考えでしかないんだ。

……だけど、俺はロボツト「イエーガードとなる事で女にモテた。そこで気付いてしまったんだ。

モテるって事は愛されるといふより、便利に思われる・自慢の一品を手に入れるって事なんじゃないかと。

エロゲーやラブコメのようにはいかないんだ。現実ほ。

少なくとも、あの才子という女は俺を愛しているのではなく、退屈凌ぎの道具としてしか見ていなかったと捉えた。

俺、嫌なんだよな。

人に頼られても、向こうから一方的に利用されるのは……………。

だから、「わたしと付き合え」と、言われても考えてしまっただ。……だが、全ての女が打算で他人と付き合うものであるかは分か

らない。

偏見はしてしまい勝ちだが、偏見は良くない事は分かっている。  
だから残り2人のデートも一応行ってみよう。

今日は疲れた。精神的に……。

明日の為に、自宅へ帰還し、文字通りの充電としよう。

こうして、まずはカオリとのデートがこれにて、終了した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4776ba/>

---

オラはロボになっちまっただ

2012年1月13日00時53分発行